

研 究 会・シンポジウム報告

2016 年 1 月 9 日（土） 定例研究会報告

テーマ：「巨大大事業と失敗—エネルギー環境分野を中心に」

報告者： 齋藤 雄志（専修大学名誉教授）

時 間： 14：00－17：00

場 所： 専修大学神田校舎 1 号館 13A 会議室

参加者数：10 名

報告内容概略：

戦後日本の歩みを振り返る際、例えば敗戦国から世界有数の経済大国へ日本が変貌する中で、政府、民間を問わず、また成功、失敗に関わらず、多種多様な政策が実施されてきた。本報告では、世界各地での原発、エネルギー技術開発、環境事故を念頭に、巨大システムの計画から運用までの失敗を、戦略的失敗、偶発的失敗、技術的失敗に整理し、とくに戦略的失敗に着目して、その構造と回避の方策を論じた。

偶発的失敗が十分に正しく作られたシステムへの偶発的事象が原因であり、技術的失敗が正しく作られたシステムの運転・運用・利用の失敗が原因であるならば、戦略的失敗とは、目的・計画からシステム構築・運用のプロセスのなかで、システム構築の前段階の「計画」前後部分での重大な失敗のことをさす。計画・設計段階、組織などが原因で、その結果として構築されるシステムに本質的問題・欠陥が生じ、これを原因として事故・失敗を起こす場合がこれにあたる。

以上を元に、戦略的失敗の意味、戦略的失敗の諸要因の分類、計画・実行プロセスにおける失敗要因を述べた後、事故・失敗の背後にあるシステム特性として、戦略的失敗におけるシステムの特性を説明した。失敗の事例として、原子力政策、関連組織の硬直性により、有効な津波対策が抜け落ちてしまった福島原発事故、不適切な行政対応と科学的立証の失敗、情報伝達構造、事故後の線引の三大失敗構造を伴った水俣病のほかに、米国カリフォルニア電力危機、エンロンの破綻、スリーマイル島、チェルノブイリ原発事故、JCO 臨界事故、リニア中央新幹線などを取り上げた。最後に、大規模事業の失敗の対応方法として、組織・意思決定システムの改善、知識共有、制度的対応、政治的意思、並びに保守主義を挙げた。

フロアからは、事業をどの時点で失敗とみなすのか、戦略をいかにとらえるか、人類の歴史における進歩と「失敗」、失敗と成功の因果関係、推進する事業規模の大小をどのように意思決定するべきかなど、多くの質問がなされ、活発な討論が行われた。

記：専修大学法学部・末次俊之

2016 年 1 月 23 日（土） 定例研究会報告

テーマ： 経済学はどのような「科学」なのか、そして、どう教えられるべきか

報告者： 吉田雅明・金子洋之

時 間： 14:00-17:30

場 所： 生田校舎 9 2B 会議室

参加者数：15 名

報告内容概略：

日本学術会議による経済学教育の参照基準は、その公表された素案がライオネル・ロビンズ流に経済学を定義し、ミクロ・マクロを基礎とし、流儀に従わない科目、経済学史や経済史すら応用科目として位置付け、経済学教育を体系化しようというものであったため、十数の学会より異論が出された。吉田所員はこの間の経緯を紹介した上で、参照基準作成グループの「観察事実によって経済理論が検証される」というあまりにも素朴な科学観が問題の根底にあることを指摘する一方、経済学史上の深刻な論争や理論の転換は、不都合な事実を巡って行われるというよりも、理論展開の整合性を巡って行われてきたことから、経済学とはどのような「科学」であると考えられるべきか、経済学のリアリティは何に依拠するものとするべきか、「三層構造モデル」を示しつつ概説し、経済学はどのように教えられることがその発展に資するのかを論じた。対して金子所員は、科学哲学の現在に至る歩みを概説した上で、三層モデルが言及すべきはラカトシュによる「科学的研究計画」よりも、経験的問題だけでなく概念的問題の解決を重視するラウダンによる「研究伝統」がなお適切であることを指摘し、また、多様性の科学に対する積極的意義を導くために有用なものとして、理論が説明すべき現象は競合理論の存在によって決まるというファイヤーベントによる議論を紹介した。経済学部カリキュラム改編とも深く関わるテーマでもあり、当日は極めて活発な意見交換が行われた。

記：専修大学経済学部・吉田雅明